

## 過疎・人口激減地域における人口流出に関する研究

本論文は、過疎化が著しく進行した山村地域と炭鉱閉山に伴い人口が激減した産炭地域の双方を取り上げて、市町村スケールで人口流出の実態調査と転出移動者の追跡調査の分析を行ったうえで、これらの地域を「縁辺地域」という共通の枠組みで捉えてその理論化を図ろうとするものである。

本論文は3部、7章から成る。第1章で、これまでの山村研究と産炭地研究の動向を概観するとともに、これらの地域を人口流出・縁辺化過程という視点から把握する視点が必要なことを主張する。その後、第I部「人口移動と過疎問題」では、人口移動研究と過疎地域研究の双方に目配りするための論点整理を行っている。まず第2章では、過疎問題の発端となる人口流出を位置づけるために人口移動研究の課題と視点を整理し、続く第3章で、社会変動論に依拠しながら、地域変動論として、人口を指標として過疎現象の実態と動向について全国的スケールで概観している。ここで申請者は過疎現象を人口流出に伴う単なる衰退現象としてではなく、地域機能の衰退・損失 *deprivation* として位置づけている。

次いで第II部では、過疎山村及び炭鉱閉山地域における人口移動と地域機能の衰退・損失が実証的に分析されている。いわば、本論文の核となる部分である。第4章では大分県上津江村を事例に4,000人に及ぶ転出者の属性分析を行い、過疎山村からの人口移動の実態を明らかにしている。その結果、過疎山村における人口流出は、社会地理学的にはライフサイクルに対応したものと対応しないものとに大別され、人口地理学的には便益に恵まれた場所への移動という遠隔性を反映していることが明らかにされている。さらに、第5章では、長崎県高島町を対象として、炭鉱閉山に伴い、短期間の間に全国各地に転出した炭鉱離職者とその家族3,600人余りの人口流出の特徴を分析している。ここでは、過疎山村とは異なり、非ライフサイクル的な移動が卓越すること、移動者の階層によって移動パターンが異なることなどが明らかにされている。いずれも、住民票除票など今日では利用が困難となっている指標に基づいた分析であり、資料的にも貴重な分析である。

こうした実証分析を踏まえて、第III部では、人口激減地域における地域空間の縁辺化に関する理論化が試みられている。縁辺地域では、まず伝統的環境利用の変容が人口流出となって現出し、その結果、ディプライベーションすなわち地域生活機能の剥奪につながるという連関がみられる。こうした連関を説明するために地域間格差の形成メカニズムに関連する諸説を概観し、地域空間の縁辺化について理論化を図ろうとしている。ここで扱われている諸理論はきわめて多岐に及んでいることから、本論文では必ずしも固まった結論とはなっていないものの、今後の理論化の可能性を十分に示唆する内容になっている。

以上のように、本論文は、これまで別個に扱われてきた過疎山村、炭鉱閉山地域、人口移動に関する研究を接合するとともに、人口激減地域における縁辺化に関する理論化の検討を試みた意欲的で優れた研究であるといえる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるのに十分な能力をもつものであると認めるものである。